「願いごと」

伊藤貴晴　作

【１】

少女 流れ星は宇宙から降ってくるゴミが燃えてるんだって聞いたときはがっかりしたけど、よく考えたら本物の隕石がたくさん落ちてきたら家が壊れて人が死んでクレーターだらけになって願いごとするどころじゃないからそれでいいと思うようになった。だから私の将来の夢は空からゴミをばらまいて流星群を作ること。で、この流星群は私が作った流星群だから、いくら願い事をしても叶えてあげないよって世界中の子供達に教えてあげるの。これって結構大事なことだと思うんだよね。だって、流れ星に願いごとをしたって、誰が叶えてくれるの？　流れ星に神様が宿ってるっていう話は聞いたことがないし、星が落ちるっていうのは誰かが死ぬ前兆として語られることの方が多い気がするし、そんな死ぬ瞬間に誰かの願いを叶えてる場合じゃないと思うし、そもそも死ぬときに願いごとされるのって迷惑だよね。流れ星が落ちる間に願いごとを３回唱えるのは不可能だってことは古来議論し尽くされてきたことで、私が思う最短の願いごと「金、金、金」っていうのも、流れ星は見つけた瞬間に落ちてるからやっぱり不可能だと思う。願いごとをするなら神社に行った方がいいよ。

【２】

少女 神社に行くときは目立つ格好で行けっていうのを誰かに教わった気がするんだけど、誰に聞いたのか思い出せない。神様はたくさんの人の願いごとを叶えてあげなきゃいけないから、地味な格好だと見逃されるかもしれないんだって。だから私、神社に行くときは赤い服とかホットピンクのズボンとかとにかく目立つ服を着るようにしてる。でも人もたくさんいるけど、神様だって八百万いるんだから、見逃さないようにちゃんとみんなの願いを叶えてあげてほしい。でも願いを叶えてっていうのはそもそもこっちの勝手な願いで、そういう他力本願なのはどうかと思うし、神様だって願いを叶える義理も義務もないかもしれないから、みんなの願いを叶えてあげてなんて大層なことは言わずに、こっそり私の願いごとだけ叶えてくれたらいいんじゃないかな。

【３】

少女 子供の頃はサンタクロースを信じてたけど、そういうのは嘘だって気づいたのはいつだったかな。サンタクロースもツチノコも河童もいないし、赤ちゃんはコウノトリが運んでこないしキャベツ畑で生まれないし、天国も地獄もないし死んでもお星さまになったりしない。今見えてるあの星は燃えてるだけで、その光が見えるだけ。こういうのをリアリストって言うのかペシミストって言うのかは個人の判断によるけど、私はどちらとも思わない。かといってロマンチストやオプティミストになれるとも思わない。ちなみにペシミストっていうのは悲観論者、オプティミストっていうのは楽天家っていう意味で、そういう最近覚えた言葉を使ってみたいっていう虚栄心だけで喋ってみると、アイロニカルなロジックでポスト構造主義を批判してみても、ペルソナとメタファーで玉虫色になった自分を見つけることはできないし、トートロジーのイデオロギーでイノベーションなんか起きるはずもないから、人はやっぱり輪廻（りんね）しながら解脱（げだつ）とか涅槃（ねはん）を目指すべきだと思う。

【４】

少女 神様はいない。でもいないことを証明することは、ツチノコやネッシーがいないことを証明するのと同じくらい難しい。こういうのは「悪魔の証明」って言うんだけど、神様とか天使とか悪魔とかポケモンとか、そういう不確かな存在を否定することはできないかもしれないけど、でもそこにいることを確かめることもできなくて、結局、いてもいなくても同じじゃないって、そう思ってたんだけど、どうもそうではないらしいって気付いたのは最近のことで、いや、気付いたっていうか、ひょっとしたらっていう期待とか、憧れとか、そういうのを持つようになって、それはつまり、私に願いごとがあるっていうことなんだと思う。願いごとがあるときは歌えばいいって誰かに言われたことはないと思うけど、何となくそんな気がするから歌います。

 少女は歌う。

【５】

少女 歌を歌うのは体にいいんだって。呼吸や発声は細胞を活性化させて新陳代謝を促進するし、運動するのと同じくらいカロリーを消費して、脳も活性化するし、感情が動かされる。そういうのをカタルシスって言う。カタルシスっていうのは魂の浄化作用のこと。魂が浄化される。歌うと心が揺れる。楽しいときには楽しい歌を歌って、悲しいときには悲しい歌を歌う。寂しいときには寂しい歌を歌って、心細いときには心細い歌を歌う。

 少女は歌う。

【６】

少女 谷川俊太郎の「二十億光年の孤独」を思い出す。私の万有引力は仲間を欲しがっていて、宇宙は膨らんでいくから不安で、私は孤独で、くしゃみをして、願いごとをする。私のこと覚えていてね。覚えていてねっていうのは他人の人生に介入するような尊大な願いで、本当は私が願うのはおこがましいと思ってる。かと言って、私のこと忘れてねっていう願いも難しい。他人の人生の一部を勝手に奪い取ってはいけないと思う。誰かの心に一生残っていたいっていうささやかで尊大な願いがあって、一方で、誰からも忘れられてしまえば自由になれるんじゃないかっていう妄想もあって、でも本当は怖くて、たまらなく不安で、孤独で、泣きそうになるけどでも涙なんか出なくて。忘れてしまうのが怖い。私にとって大切なことを、一生覚えておこうと思ったことを、あの光のまぶしさと、息をのむ美しい光景と、澄んだ空気の冷たさと、友情と、私を形作るすべてのものを、忘れたくない。でも忘れてしまうのかもしれない。そして忘れられる。みんなが私のこと忘れたら、いてもいないのと同じになるかも。忘れられてしまうのが怖い。かくれんぼをしていて自分だけ見つけてもらえないような。クリスマスに自分だけプレゼントをもらえないような。だから約束をする。ちゃんと見つけてねって。ちゃんとプレゼントをちょうだいねって。私のこと覚えていてね。でもそんな約束をしたことさえ忘れてしまう。誰かにそんな願いごとをされたような気がするけど、もうそんなことは覚えていない。

 終わり。